

植民地満州国の開発は、 軍事優先・徹底した原住民の収奪

「五族協和」「王道楽土」のスローガンをかかげて出発したはずの「満州国」の開発は、鉄道炭鉱製鉄などの軍需産業に重点がおかれ、生産される食糧も原料資源もすべて日本軍に調達されました。満州の農民と商工業者は収奪の対象とされ、営業も生活も成り立たない状態に追い込まれました。

「南満州鉄道株式会社」（満鉄）は政府が資本の半額を出資する国策会社として、関東軍の指示のもとに産業も経済も独り占めにしました。

中国人労働者は日本人の半分以下の低賃金と劣悪な条件のもとで酷使されました。日本からの農業移民受入れのために、満鉄は広大な農地を強制的に農民から取り上げました。

戦争の拡大により兵役に取られる人が増大して、日本国内での労働力不足が深刻になると、中国人を日本に強制連行して炭坑や建設現場で酷使しました。朝鮮の若い女性を「女子挺身隊」などの名目で戦地に送られ「従軍慰安婦」にされました。



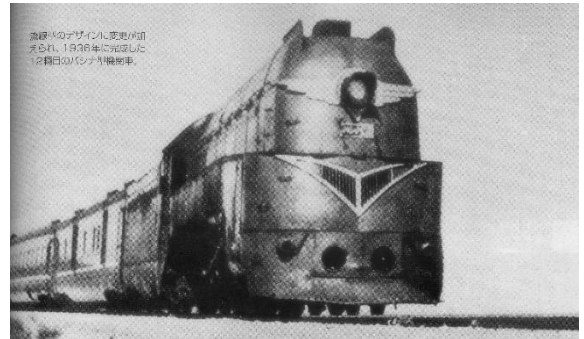
「満鉄」本社(大連)「満鉄」は関東都督府の監督下に置かれ、満州での権益を守るため、鉄道炭鉱製鉄・病院・ホテル・学校経営まで行う日本政府の代行機関でした。満鉄はその影響力の大きさから「満鉄王国」とまでいわれました。社員数は1944年(昭和19)には39万8千人でした。(写真は『図説満州帝国の戦跡』河出書房新社より)



世界屈指の撫順炭

世界有数の露天掘りの炭田として有名。日露戦争で日本が占領し、炭鉱の採掘権を手に入れました。満鉄が創業すると、満鉄に移譲さ

れ、満州の増大するエネルギー源として石炭の需要を一手に引き受けました。それだけに撫順炭鉱はしばしば抗日ゲリラの襲撃の対象になりました。(『写真記録2日中戦争』ほるぷ出版より)



日本が日露戦争でロシアが敷設した東清鉄道(長春―旅順大連)の経営権を獲得しました。この鉄道は日本軍の占領地での兵員や物資の補給に使われました。満鉄は、鉄道経営だけでなく、沿線「鉄道付属地」への権利や鉱山の経営や鴨緑江沿岸の森林伐採権など強大な権益をにぎり、その地域の政治や軍事までも支配しました。

収穫した大豆を供出する現地農民



現地の農民たちは、強制的に収穫物を供出させられた。馬車で収穫物を運農民たち。(『写真記録2日中戦争』ほるぷ出版より)

満州の中国人労働者の住宅



日本支配のもと、中国人労働者の生活はどん状態。スラム化した中国人のぼろぼろの住宅は、雨と風をさえぎるのも、おぼつかないありさま。

(『写真記録2日中戦争』ほるぷ出版)